

## 震災を共に乗り越えた皆さんの底力を借りて これからも前に進んでいきたい

むかわ町長 竹中喜之



――発災当日の初動について伺います。

9月4日から5日にかけて台風21号が上陸し、警報が発令され、倒木などもありました。町内でどの程度の被害があったのかなと思つて就寝した矢先のことでした。9月6日3時7分、寝ついたなと思つた時に地震が発生。疑問符と感嘆符が交錯し、「役場に走らないとだめだ」と、すぐに家

を出しました。

この町と命を守るんだ、そして守るためには現状の正確な把握が必要だと思いがら初動を起こしました。むかわ町役場に到着すると、怪我をしていた職員もいましたが、次々と職員が集まり、3時40分に災害対策本部を立ち上げました。最初に頭をよぎったのは津波です。すぐに津波関係の情報を収集。津波は来ないものの海面が多少は上がるという情報があったので、まず海に面した地域に避難を呼びかけました。5日前の9月1日に防災訓練を行っていたこともあり、避難所も迅速に立ち上げていきました。

そこから先は総動員で震災対応。矢継ぎ早に町内の被害報告が上がってくる緊迫感のある中で、ただ使命感を持って職員一同

と共に取り組んでいたのは覚えています。

――避難所が設置された翌日、町長自ら避難所を回って、避難者への声かけをされたそうですね？

本来ならば私が全避難所を回って、一人ひとりに声をかけるべきですが、そういう状況ではない。副町長が穂別地区で私が鶴川地区と分担し、すべてを回りました。

緊急時であり、いち早く現場を回ることに重要だと考えて、「とにかくご不便、苦労をおかけしますが、明けな夜というのはないですからね」と声をかけていきました。ふだんは元気な方たちが肩を落としている姿が、今でも脳裏に残っています。

災害時の基本原則として、町民の皆さんへ正しい情報を速やかに発信していくと

もに、自らが先頭に立つことが重要だと思つています。そして、職員の皆さんもそれについて来てくれた。その一体感があつてこそ乗り越えられた未曾有の大震災でした。

――運営が難しいとされる福祉避難所を立ち上げて機能させたことは、全国的にも先進事例となりました。

現場が各緊急対応に迫られる中で、事業者と協力し、要介護者などの災害弱者を受け入れる「福祉避難所」の開設に至りました。あれもこれも行政が網羅できればいいんですが、被災している中、自分たちどうやってこの急場をしのげるか。皆さんの底力を逆に私たちが学ばせていただきました。「自助」「共助」「公助」という言葉があります。その「共助」の視点から立ち上がった「福祉避難所」。町民の皆さんの力を結集してできた全国でも先進的な事例になったと理解しています。

――ボランティアの力が復旧の大きな力となりましたね。

今回の震災前にも、それぞれの町に「地



緊迫した時間が続く災害対策本部

域防災計画」があつたと思うんです。その中で「受援」については整理されていなかった。ボランティアセンターを通して支援に来てくれた方たちをどう分担して、どう活用していくのか。この整理について非常に悩みました。物資の分配も含め、今回の地震を受けて「受援力を意識した計画」というものも整備していくことの重要性を痛感しました。

避難所の運営もそうですが、継続性が重要。発災直後を乗り切ったあとの対応をどうするか。震災の教訓を活かす場面です。

――町が取り組んでいる「恐竜化石を活かしたまちづくり」が災害復旧の大きな支援になったと聞きました。

むかわ町は恐竜化石をまちづくりに活かしていくと、平成29（2017）年に設立された「にっぽん恐竜協議会」という自治体連携に参加しています。実はこの協議会では災害時の相互応援も盛り込んでいました。お互いの魅力発信に向けて連携していきましょうとした矢先に、最初に該当（被災）したのがむかわ町なんです。加盟していた熊本県の御船町、兵庫県の丹波市、丹波篠山市に支援をいただきました。姉妹都市の富山県砺波市からもご支援をいただいています。御船町は熊本地震で大きな被害を受けた町で、当時、復旧復興に向き合っている最中だったんですが、胆振東部地震が起きた直後に「今はむかわ」という合言葉で、震災対応の知見を持った職員がいち早く駆けつけ、避難所運営や防災証明書の発行など、ご指導をいただきました。全国各地からの応援派遣は、わからないことだらけの当時の状況で本町の職員の精神的な安心感にもつながりました。職員にとってはピンチの時に駆けつけてきたヒーローのよ

うな存在だったとも聞いています。この学びは、我々にとっても大きな財産になったと思っています。

そして令和元（2019）年、宮城県の大森町が台風で浸水被災した時に、今度はうちから職員を2名送り出しました。復興の途上であることを自覚しながらも「恩送り」として、支援をもらったむかわ町が今度は被災地を支援する側なんだという思いを持つての送り出しです。

—— 応急仮設住宅の面では、鷗川高校生徒寮を仮設住宅で建て、話題となりました。

応急仮設住宅などへの対応は、3町で連携して国や北海道に要望提案をしました。鷗川高校生徒寮は、全国初の寄宿舎タイプの仮設住宅となり、非常に感謝しています。被災した方々にどう寄り添っているかという思いが一致したことで実現したんだと思います。

その仮設に入居する鷗川高校野球部の生徒自身も災害ボランティアを行うなど、地域が一体となりました。震災復旧が地域と子どもたちをより強くつなげた一面もあります。今（令和2年11月）の3年生は被

例的な取り組み、復興の姿を全国に示しながら埋没しないように、これからも連携して進めていかなければならないと思っています。

—— 令和元（2019）年7月に策定された「むかわ町復興計画」についてお聞かせください。

復興計画に最優先課題として掲げていた「住まいの再建」はおかげさまで果たせた



3町長が連携して全国へ支援を呼びかけ（中央が竹中町長）

災時の1年生ですが、子どもたちはこの町の元気の源ですね。

また、おかげさまで災害公営住宅などの建設は当初の予定通りに進み、令和2（2020）年11月中旬に仮設住宅から転居することができました。鷗川高校の新寮も年内に完成します。被災した消防庁舎鷗川支署の移転改築についても工事が進んでいきます。被災した方々の生活再建や、災害により強いまちづくりが徐々に進んでいるのを実感しています。

—— 「災害により強いまちづくり」は今後に向けた一つのキーワードですね。

消防庁舎鷗川支署の移転改築をはじめ、



ノーベル化学賞を受賞した北海道大学鈴木章名誉教授から町内小中高校に贈呈された激励色紙

この2年間でした。しかし、被災した建物が解体され、空き地が目立っています。まだ仮設店舗などで営業をされている方もおり、震災により人口減少も加速している。次の課題は商業の活性化を含めた「まちなかの再生」です。今、住民の皆さんと検討会を立ち上げ、話し合いを進めています。鷗川と穂別、両地区のまちなかを再生させて、そして結ぶことができるか。また、恐竜化石といった地域資源をまちづくりにどう活かしていくか。まだまだ課題は山積みです。

そこに向かって町民の皆さん、そして町職員も含めて、これまでもらった支援を力に変えて、その力を一つひとつ形にしていきたい。創造的な復興の意味合いとして、元に戻すだけでなく、その先をしっかりと見据えた持続可能なまちづくりをしていく。要するにピンチをヒントにして、ヒントをチャンスに結びつける未来志向ですね。皆さんと共に進めていきます。

—— 最後に読者へメッセージをお願いします。

最悪が来ないことを強く願いながらも、

震災で得た教訓を基に様々なことに取り組んでいます。町内外の団体や民間企業とも災害連携協定の締結を進めています。町内に車のテストコースを持ついすゞ北海道試験場とは、再建したいいすゞ寮を避難所としても活用させていただく協定内容となっております。本当にありがたいことです。そして、近年の気候変動とともに昨今は日本海溝・千島海溝型巨大地震による津波も可能性として想定されているなど、被災を経験した町として災害により強いまちづくりをさらに進めていきます。

—— 復旧復興では3町の連携が大きな力になったと聞いていますが。

明治時代、3町は一つの戸長役場でした。言ってみれば兄弟の町なんです。今回、かなりの面積の森林が被害を受けましたが、3町の森林は一つの森林組合に一括されています。ここからここまですが厚真町だね、ここからここまですが安平町だね、と簡単に線が引けるものではないんです。

3町連携してここまで来られましたが、震災からの復興を遂げたとはまだ言える状況ではとてもありません。被災地として先日常の防災・減災の備えを固めていくことが重要です。中島みゆきさんの『時代』という歌に「あんなこともあったねといつか笑って話せるでしょう」といった歌詞がありますが、笑って話せる時代をつくるためにも、皆さんの底力を集めて前に進んでいきたいですね。

まずはコロナ禍を乗り越え、今を体得の機会として捉え、前へと、復興へと向かう元気なまちの姿をお見せすることで、震災でご支援いただきました皆さんへ「ありがとうございます」の感謝を伝えてまいります。



被災者を受け入れる住宅が完成し、鍵を交付